

交通事故

7月11日、穴水町の県道で発生した痛ましい交通死亡事故。軽乗用車と軽トラックが正面衝突し、軽トラックに乗車されていた92歳の男性と89歳の女性が亡くなられたこの事故は、単なる不幸な出来事として片付けられるものではありません。それは、高齢化が急速に進む奥能登が抱える課題を浮き彫りにしたように感じます。

今回の事故の当事者は、双方とも高齢ドライバーでした。報道によると、一方は買い物帰り、もう一方は七尾の病院からの帰り道であったといえます。高齢ドライバーによる事故は全国的な課題ですが、過疎化が進む奥能登ではその背景がより切実です。公共交通機関が限られるこの地では、自家用車は生活の「足」であり、免許を返納することは、自立した生活を諦めることと同義になりかねません。危険を承知でハンドルを握らざるを得ない、この厳しい現実。私達も日常で、ひやりとさせられる高齢ドライバーの運転に遭遇し、「危ない」と感じた経験は少なくないはずです。今回の事故においても、判断力や反応速度の低下が事故の一因となった可能性は否定できません。

さらに、この事故は、奥能登の医療提供体制が抱える課題をも露呈させました。日々の通院のために、多くの高齢者が七尾や金沢といった遠方の大きな病院へ足を運んでいます。その移動手段のほとんどが、ご自身での運転か、家族による送迎です。穴水からこれらの病院への往復は、身体的、精神的な負担が大きく、その疲労が運転中の集中力低下を招き、事故のリスクを高める要因にもなり得ます。医療を受けるための移動が、命を危険にさらすことにつながっている。この矛盾した状況に、胸が締め付けられる思いです。

この悲劇は地域の高齢化と、それに伴う医療提供体制の脆弱性という構造的な問題を象徴しています。高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる社会を築くためには、公共交通確保・交通安全対策と医療提供体制など、複合的なアプローチが強く求められます。奥能登のような地方においてこそ、地域の実情に根ざした持続可能な支援の仕組みを早急に構築していく必要性を強く感じさせられた出来事でした。